

博士論文（要約）

接続表現の多義性に関する日韓対照研究：
neunde と kedo を中心に

東京大学大学院総合文化研究科

池 玫京

序 論

本研究は対応表現とされてきた現代韓国語の **neunde** と、日本語の **kedo** を取り上げ、両形式の使い分けと機能を考察する。従来の研究は **neunde** と **kedo** の用法分類を中心に行われてきたが、分類の基準が明確に示されておらず、分類の意義と分類間の関係が不明確であるという問題があった。そこで、本研究は **neunde** の考察を通して、一般性のある複文の分類基準を提示し、**neunde** の日本語対応表現とされる **kedo** や類似表現を対象に検証を行う。さらに、対象形式の接続範囲を示すことによって、**neunde** と **kedo** の多義性を明らかにし、複文全体の中で位置づけることを目的とする。

第1章 先行研究

第1章では、今までの主な研究の成果をまとめ、その問題点を確認した上で、本研究の目的を述べた。従来の研究における問題点は大きく三点にまとめられる。第一に、多岐にわたる **neunde** と **kedo** の使い分けをどのように分類するか、その基準が明確ではない。分類基準が確立しない限り、分類の意義が示せず、分類結果が示唆する点が十分に理解できない恐れがある。第二に、分類間の関連性が明らかになっていない。記述的研究では両形式の振舞いについて考察した上で用法を分類しているが、その結果がどのように関連しているかについては言及されていない。そのため、なぜこれらの用法が同じ **neunde** や **kedo** という形式で表せるのか、疑問が残る。第三に、**neunde** と **kedo** の複文における機能と解釈過程、及び動機づけが示されていない。これらは全て関連性を持って連動していると思われるが、従来の研究では全てを包括した説明が見られなかった。これらの問題点を解決するために、本研究は **neunde** と **kedo** の実際の用例を分析し、両形式の使い分けと関連性、さらに複文における機能を明らかにすることを試みる。第2章では、その準備段階として研究方法について考える。

第2章 研究方法

第2章では分析対象である **neunde** と **kedo** の形態的特徴をまとめ、分析方法と用例分析の際に確認する項目について考えてみた。**neunde** は述語の種類とテンスによって、**neunde**、**eunde**、及び **nde** という異形態が使い分けられる。また、**kedo** はケド、ケレド、ケレドモ、ケドモという形が存在し、**ga** との関係も問題になる。前章で従来の研究を検討した際に、**neunde** と **kedo** の用法を単に分類するだけでは総合的な説明に至らないこと、また抽象的な定義では実際の用例とはかけ離れてしまうことが分かった。この問題を解決し、両形式の振舞いを明らかにするために、本研究は以下の方向で考察を進める。

一つ目は、前件と後件の意味内容とその関係に注目して分析を行うことである。従来の研究では、**neunde** や **kedo** 複文の意味を接続表現に求め、文全体の解釈と接続表現自体の意味とを同一視する傾向があった。本研究は接続表現そのものに、文全体の意味を求めるとはならず、前件と後件の意味内容と関係に注目し、分析の範囲をより広げることを目指す。二

つ目は、分類の基準を設けることである。分類基準があれば全ての用例について同じ条件で分析できる上で、分析の主体が変わっても判断が変わり難く、今後の活用可能性が高いという利点もある。また、分類の基準を決めることは、neunde と kedo の使用条件を明らかにすることにつながり、分類間の関係性も見えてくると予想される。最後に、本研究は実際の話しことばと書きことばのデータを用いて、両形式の分析を行う。分析過程でもテキストの種類による使い分けや、分布の差を積極的に比べることによって、形式の外部要因についても分析範囲に取り込むようにする。第3章では、以上の用例分析を行うことによって見いだされた分類基準を取り上げる。

第3章 分類基準

第3章では neunde の用例分析から見いだされた、最も重要な要素を四項目取り上げ、その該当状況によって用例がいくつかのグループに分かれることを確認した。第一分類基準は「前提の有無」で、前後件の内容とその関係から前提が存在するか否かを見る。これは第二分類基準「前提との一致」と連動しており、第一分類基準で前提があると判断された用例は、想定された前提と実際の現実を照らし合わせることになる。後件が前提どおりの結果で、現実世界で実現されているのであれば、前提と一致していると判断される。当然、第一分類基準で前提がないとされた用例については一致可否を論ずることができず、第二分類基準とは無関係となる。第三分類基準は「対立」の有無で、前後の意味内容に異質性や不一致などの対立的要素が見られるかを確認する。前後件が従属節である場合と対等節である場合があり、取り立て助詞との共起によって対比の意味合いが強く表れる。最後の分類基準は「前件命題の希薄化」である。前件命題が希薄化していれば文の意味構成素ではないため、前件を削除しても意味の変化は生じない。前件の必要性については、前件削除テストで確認できる。以上、neunde 複文の分類基準について説明した。第4章ではこれらの分類基準を用いて、実際の neunde 用例を分析した結果を見ながら、分類基準の適否を考えてみる。

第4章 分析結果 I : neunde

第4章では本研究の分類基準で neunde の用例を以下の表のように分類した。

〔表1〕 分類基準の階層性とケース分け

分類基準					分類結果	
前提	有	前提との一致	有		ケース1	
			無		ケース2	
	無	対立	有		ケース3	
			無	前件命題の希薄化	有	ケース4
					無	ケース5

ケース1は前提に沿った事態展開で順接の前後関係になる上に、後件には聞き手への働きかけ性が強く表れている。そのため、前件は後件の理由や根拠として解釈される。後件の働きかけ性は命令・勧誘の文末語尾と当為のモダリティによって言語化されているため、この場合「아/어서 a/eoseo(ので)」への置き換えはできない。この特徴と類似表現の存在で、ケース1は書きことばにおける割合が低くなる。次に、ケース2は前提に一致しない事態が前後に並べられる、いわゆる逆接の関係である。今回の用例では疑問文形式の多用が目立った。予想外の事態展開について真偽を問うこともあったが、疑問文形式の二次的意味として聞き手を非難したり、反語の意味合いが含まれている用例が多かった。ケース3は対立が見られる用例の集合である。前後件の内容の異質性に加え、取り立て助詞「은/는 eun/neun(は)」を用いて対比の効果を作り出すことができる。その場合、対比する項目以外は全て既定にして固定する必要があった。

一方、前件の命題内容が希薄化しているケース4は、前件を削除しても意味の変化は生じないが、発話の唐突さが際立つなど、丁寧度には差が生じる。前件は文の意味構成には関わらず、後件の発話行為に付ける注釈として考えられ、発話行為領域における結びつきである。前件の後件への導入や前置きという役割は語用論のレベルのもので、後件の発話が持つリスクを軽減するために用いられるのである。そのため、聞き手の存在が非常に重要であるが、書きことばではケース4が1件も現れなかったことからこの特徴が理解できる。最後に、ケース5は前件で説明対象を提示し、後件とともに説明を加える。他のケースと違って形態・統語的特徴はなく、他の要素との共起関係も目立つ傾向はなかった。このように、neundeは個別の複文の解釈に直接的には影響せず、決まった意味で解釈されるような接続表現ではない。むしろ、周りの形式や文構造によって、neundeの解釈が決まるのである。さらに、本研究で提示した分類基準は、neundeの使用要件とケース間の関係が推測できるものであり、ケース間の類似点と相違点、テキストの種類による分布の違い、他の接続表現との関係が明らかにされた。これを本研究で提示した分類基準の一次検証とする。次の第5章ではneundeの対応表現とされる日本語のkedoを対象に、分類基準の妥当性について二次検証を行う。

第5章 分析結果Ⅱ：kedo

第5章では本研究の複文の分類基準を用いて、日本語のkedoの用例を分析した結果、kedoの用例は四項目の分類基準によって、四つのケースに分けられることが分かった。前件内容から発生する前提に後件が一致する用例は見つからず、ケース1は存在しない。また、前提があるものは全て前提と食い違いを見せたため、ケース2となる。一方、前提がない用例は、対立があるケース3と対立がないものに分かれる。対立が見られない用例は、さらに前件命題が希薄化したケース4と、希薄化が見られないケース5に分類された。即ち、日本語のkedoにおいてはケース2、3、4、5のみが存在し、全ケー

スの用例が見られた韓国語の **neunde** とは、接続する範囲が異なるのである。

〔表2〕 kedoのケース分けと分布

		分類基準				分類結果
前提	有	前提との一致	有			
			無			ケース2
	無	対立	有			ケース3
			無	前件命題の希薄化	有	ケース4
					無	ケース5

各ケースの特徴について見ると、ケース2は食い違いによる意外感や不満が現れやすく、**noni** との置き換えが見られた。ケース3は前後件内容に対立が見られる用例で、ノダとの共起は滅多にないという統語的特徴があった。また、取り立て助詞を伴うことによって、対比の意味合いを強く帯びる。ケース4は発話行為への注釈として、前件の命題内容が全体の意味構成に貢献しないものであった。ノダとの共起は、話し手が思う聞き手の情報認識によって使い分けられていた。これはケース5の疑問文においても、ノダとの共起を決める基準になることが初めて分かった。最後にケース5の平叙文はほとんどノダと共起していたが、情報の間には対立が見られず、整合性が高い説明の構造であった。ケース5の平叙文をケース3と比べることによって、ノダの有無と対立との関係が明らかになった。このように、**kedo** による接続にはノダとの共起が大変重要な要因になっており、**kedo** 自力で接続できる範囲はケース2からケース4までで、ケース5においてはノダとの共起がある場合に接続できることが分かった。

最後に、**kedo** の形態はケド、ケレドモ、ケレド、ケドモと多様であるが、用法の違いはなかった。今回のデータではケドの用例が圧倒的に多く、他に現れたケレドモ、ケレドという形態はそれほど用いられないことを確認した。この三つは同じ意味・機能を持つ接続表現であると考えられ、最も頻繁に使用されているケドが代表形として相応しいと言える。しかし、度々**kedo** と同一表現にされる **ga** については説明がされていない。次の第6章では **kedo** に関する第5章の考察を踏まえ、**ga** について分析する。他にも、**kedo** と置き換えられる **noni**、また **neunde** と **kedo** を述べる際に必ず言及される韓国語の **jiman** を取り上げ、分類基準の最終検証を行う。

第6章 分析結果Ⅲ：類似表現

第6章では **jiman**、**ga**、**noni** について調べ、第4章と第5章で記述した **neunde** や **kedo** の特徴と比べてみた。その中で明らかになった内容は以下の表のようにまとめられる。

〔表3〕分類基準と各形式のケース分け

分類基準とケース分け					neunde	jiman	kedo	ga	noni		
前提	有	前提と の一致	有		ケース1	○					
			無		ケース2	○	○	○	○	○	
	無	対立	有		ケース3	○	○	○	○	○	
			無	前件 希薄	有	ケース4	○	○	○	○	
				無	ケース5	○		△	○		

まず、neunde はテキストの種類に関わらず用いられるが、jiman は書きことばで好まれる傾向があり、jiman は話しことばの中でも格式ばった公の場での発話に用いられる。それぞれのケース分けにも相違点があり、neunde はケース1からケース5まで全てが見られるが、jiman はケース2、3、4のみ見られ、両形式は接続する範囲が異なることが分かった。jiman は不一致が見られる事態関係のみに接続し、そのような事態関係であれば neunde との置き換えが可能である。両形式が置き換えられる場合にも、文形式の制約が存在し、jiman は疑問文形式が現れにくい。

一方、kedo は話しことばで、ga は書きことばで好まれ、話しことばでは改まった場面で丁寧体語尾とともに使われる。そのため、kedo と ga の置き換えは文法的であっても不自然さを感じる場合が多い。kedo はケース2から4まで、不一致が見られる事態関係は自力で接続するが、不一致が見られないケース5は、ノダとの共起が見られる。ところが、ga はケース2からケース5まで接続し、ノダとの共起は必須ではないため、ケース5の ga を neunde に置き換える場合ノダとの共起が必要となる。さらに、noni はケース2から3まで、不一致が見られる事態関係を接続する。ケース1に属する neunde 文の和訳にカラと一緒に用いられることがあるが、カラとは文構造に違いがあり、不一致の接続であることには変わらない。これらの内容を基に、次の第7章では neunde と jiman、kedo と ga、noni の接続範囲と各形式の機能を考えることによって、複文における位置づけを試みる。

第7章 接続表現の多義性

本章では本研究で取り上げた韓国語の neunde、jiman、日本語の kedo、ga、noni のケース分けを、事態の流れという観点から捉えてみた。neunde は特定の事態の流れを指示せず、単に関連性のある事態として前後件を提示するため、「-~0~+」にわたって解釈されるが、jiman と kedo、noni は「-」の流れの指示である。しかし、これらの間にも違いがあり、kedo はノダを伴うことで「-」の流れへの限定が解除され、「0」の事態関係まで拡張される特徴がある。また、jiman は意味論と語用論のレベルにおける不一致を接続するが、noni は意味論的不一致のみ接続する。最後に、ga は「+」の流れを排除する指示である。接続表現の指示内容を比べてみると noni < jiman < kedo <

ga < neunde の順に抽象度が高くなり、解釈の多義性が際立つと考えられる。各型式の接続する範囲を以下の表にまとめておく。

〔表4〕各形式のケース分けと事態の流れ

ケース分け	事態の流れ	neunde	jiman	kedo	ga	noni
ケース2	-					
ケース3						
ケース4						
ケース5	0					
ケース1	+					

結論

ここまで本研究の分類基準を用いて、neunde と kedo、及び関連形式の関係を確認し、形式間の異同を明らかにした。これらの接続表現には共通点が多いが、接続範囲が完全に一致しているわけではなく、共通部分でも表現様式の違いがあった。また、接続する意味範囲が広く、多義性が見られるという性質を共有していた。本研究は韓国語の neunde と日本語の kedo の考察において、共通の分類基準を設け、複文分析の枠組みとして可能性を示した。この成果は、外国語教育の分野での要求を満たし、応用できる可能性が高いと思われる。とはいえ、不十分な点もあり、未だ課題が多く残されている。

まず、多義的接続表現における使い分けの拡張について説明されていない。今回の分析ではケース分けを示し、主に意味分類においてケース間の関係を表すことに留まった。ところが、ケース分布でも確認したように、使用頻度には差があり、中心となるケースと周辺的なケースに分かれる可能性がある。そのように各ケースを捉えた場合、使い分けと接続範囲における拡張の方向や順序、理由も考察すべき点である。また、接続表現の多義性について多くの形式を対象に実態を調べてみる必要がある。その上で、多義的接続表現と一義的接続表現の解釈課程が明確に示されれば、それぞれの仕組みがより深く理解できると思われる。さらに、今回対象にした接続表現は、節と節を結ぶ接続の機能以外にも終助詞や終結語尾としての使い方がされている。今後は終助詞、終結語尾としての使い分けの特徴を調べ、節の接続との関係、文法化の過程や理由について調べてみたい。最後に、ここで明らかになった neunde と kedo、及びその類似表現の特徴を、韓国語教育と日本語教育の現場で活用するためには、より学習者の目線に立った、分かりやすく明確な提示方法が必要である。このような疑問を解決するために、今後も様々な接続表現の記述と分析に努めていきたいと考えている。

〔表5〕用例分析の確認項目一覧表

接続表現		neunde					jiman			kedo				ga				noni	
ケース		1	2	3	4	5	2	3	4	2	3	4	5	2	3	4	5	2	3
前件 述語 種類	動詞	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	形容詞	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	名詞	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	存在詞	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
前件 テンス	非過去	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	過去	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
後件 述語 種類	動詞	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	形容詞	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	名詞	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	存在詞	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
後件 テンス	非過去	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	過去	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
文形式	平叙	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	疑問	+	+	-	+	+	+	-	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+
	勧誘	+	-	-	+	-	-	-	+	-	+	+	-	-	-	+	-	-	-
	命令	+	-	-	+	-	-	-	+	-	+	+	-	-	-	+	-	-	-
取り立て助詞		-	-	+	-	-	-	+	-	-	+	-	-	-	+	-	-	-	+
モダリティ		+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-
倒置		-	-	+	-	-	-	+	-	-	+	-	-	-	+	-	-	-	+
前件省略		-	-	-	+	-	-	-	+	-	-	+	-	-	-	+	-	-	-
因果		+	+	-	-	-	+	-	-	+	-	-	-	+	-	-	-	+	-
順序		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
日 本 語	ケド	-	+	+	+	-	+	+	+					+	+	+	-	+	+
	ノダケド	-	+	-	+	+	+	-	+					+	-	+	+	+	+
	ガ	-	+	-	+	-	+	+	+	+	+	+	+					+	+
	カラ	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ノニ	+	+	+	-	-	+	+	-	+	+	-	-	+	+	-	-		
韓 国 語	neunde						+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	jiman	-	+	+	+	-				+	+	+	-	+	+	+	-	+	+
	nikka	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	a/eoseo	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-